「個」を描ききる

『ミドルマーチ』と『灯台へ』における女性達の流動する自己

佐藤　エリ

はじめに

本発表では、他者との相互作用—共感—に焦点を当て、外部の規定する女性らしさの概念との関わりから、共にヴィクトリア朝の価値観を色濃く反映するヒロイン達である『ミドルマーチ』のドロシアと、『灯台へ』のラムジー夫人の流動・変化する自己が、どのように描かれているかを検証した。それにより、時代を超えてジョージ・エリオットとヴァージニア・ウルフが捉えようとした、個々の女性がもつ自己の重層性を明らかにした。

1.ドロシアとラムジー夫人の「美」

まず始めに、ドロシアとラムジー夫人の「美」についての言及を通して、他者が彼女達をどのように認識するかについて確認した。ドロシアの美は、彼女の過度な宗教心や極端な見方に対してミドルマーチの人々が抱く偏見を克服する力を持つ。ラムジー夫人もまた、その美ゆえに他者から難なく好意を勝ち得る。一方でドロシアとラムジー夫人の「美」は、とりわけ男性たちのまなざしを通して、美しき女性としての「役割」を付与される。例えばドロシアの場合には、「聖女のような妻」、ラムジー夫人の場合には、ヴィクトリア女王にもなぞらえられる。興味深いことに、こうした、とりわけ男性を中心とする他者の認識に対し、ウルフは、ラムジー夫人の「真の自己」と、社会が彼女に取り付ける「付属物」である「美」が、夫人の肉体を通して摩擦し合う様を、男性であるウィリアム・バンクス氏のまなざしを通して明らかにしている。

2. 近視眼の意味

次に、ドロシアとラムジー夫人の身体的特徴である「近視眼」の意味について考察した。ドロシアが実際に足を運んで労働者階級の人々の窮状を間近で見、伯父に人々の生活改善を訴えるように、ラムジー夫人も慈善活動を通して貧富の差を「彼女自身の目」で目撃する。両者の身体的特徴である「近視眼」は、決して二人の性質を否定的に表すものではなく、個々の事例をミクロな視点で見ることができる能力を示している、とも解釈できる。

3. 芸術をめぐる女性同士の共感と「個」の歴史

続いて芸術作品に対するドロシアとラムジー夫人のまなざしを通して、それらが両ヒロインの自己にどのような影響を与えているかを考察した。結婚後、夫であるカソーボンに失望したドロシアは、不幸な結婚をしたというジュリア伯母の細密画に親しみを覚え、同胞意識を感じる。ジュリア伯母は、歴史の中の一部として細密画の「静」の世界に住まう存在から、ドロシアの精神の中で息づく存在となる。一方ラムジー夫人は、自身が切り盛りするディナー・パーティーで、「動」の世界を「静」の世界に変えようとする。具体的には、娘のローズが整えた芸術的な果物皿によって一つの芸術的空間が創造され、ばらばらであった客人達の意識が一つになる。このように、母と娘の協力によって作り上げられたパーティーの空間が、客人たちを共感へと導き、その瞬間が歴史における１ページとなる。

4. 風景へのまなざし— 「静」⇄「動」

前項で考察した両作品における「静」と「動」の動きは、ドロシアとラムジー夫人の風景へのまなざしにも見出される。結婚生活が思い描いていた理想とは異なることを悟った時、ドロシアが見る風景は動きのない状態であった。しかし自らが置かれた状況の中で義務を果たして行こうと決意する時、彼女が見つめる風景に動きが見られるようになる。それとは対照的に、ラムジー夫人は、パーティーが終わった後、窓の外に聳えるニレの木のじっと動かない様子に、心の拠り所を見出す。ニレの木の姿を通して、自らの死後も自身が歴史に刻まれることを夫人は願う。

『ミドルマーチ』においては、ドロシアの道徳的成長と共に、外界の動きと彼女の精神のつながりは、より強固なものとなる。

> Far off in the bending sky was the pearly light; and she felt the largeness of the world and the manifold wakings of men to labour and endurance. She was a part of that involuntary, palpitating life, and could neither look out on it from her luxurious shelter as a mere spectator, nor hide her eyes in selfish complaining. (*MM* 788)

世界に生きる人々が日々苦難に耐え忍んで生きていることに、自らの葛藤を重ね合わせたドロシアは、自分だけが受難の道を歩んでいるわけではないことを悟り、生きづく、広大な世界の鼓動の一部として組み込まれていく。このようにエリオットは、ドロシアの他者への共感の拡大と自己認識の変化を、彼女の精神と風景がダイナミックにつながることを通して描いていく。

一方のラムジー夫人も、やがて木の背後に動きを見出し、未来へと意識を向ける。

> It was windy, so that the leaves now and then brushed open a star, and the stars themselves seemed to be shaking and darting light and trying to flash out between the edges of the leaves. Yes, that was done then, accomplished; (*TL* 92)

風が吹いてニレの木の葉が揺れ、その間から星が現れ、光を発した時、夫人はポール・ライリーとミンタの婚約が成し遂げられたことを確信する。こうして、時間が動き出し、ライリー夫妻に自らの歴史の流れがつながることに夫人は希望を託す。

5. 他者の想像力を介した「自己」の創造へ

最後に『灯台へ』において、ラムジー夫人の自己が死後も他者であるリリーの内面で創造され続けることについて考察した。リリーが夫人の過去を回想し、自らの人生の方向性を模索することを通じて、ウルフは夫人が未来に対して持つ可能性を示唆する。Steve Ellis は、ポスト・ヴィクトリアンであるウルフは、常に「古い秩序」へと方向づけられており、リリーは絵画を通して「新しい秩序」と古いものとの折り合いをつけるために葛藤していることを指摘する(Ellis 80)。リリーは、ラムジー夫人を知ることについて、以下のように思考する。

> One wanted most some secret sense, fine as air, with which to steal through keyholes and surround her [Mrs Ramsey] where she sat knitting, talking, sitting silent in the window alone; which took to itself and treasured up like the air which held the smoke of the steamer, her thoughts, her imaginations, her desires. (*TL* 161)

リリーにとって、他者が夫人と結びつけていた「美」は必ずしも彼女の本質を表すものではない。リリーが夫人を理解するのに必要な感覚とは、「澄んだ空気のような、ある密やかな感覚」であり、それは視覚・聴覚で捉えた夫人の姿や声だけではなく、彼女の思考・想像力・欲望さえも「包み込む空気」のような感覚である。こうした新たな感覚を通して、リリーは想像力の中で夫人の自己を「創造」し続けるのである。

結論

以上見てきたように、エリオットとウルフが描こうとした女性たちの自己の重層性は、両作品において、視覚・想像力・記憶を通して他者とつながることにより追求される。さらに『灯台へ』においては、新たな感覚により捉えられた自己が、他者の想像力を通して「創造」されることへと発展していくことが明らかになった。

参考文献

Beer, Gillian. *Virginia Woolf: The Common Ground*. Edinburgh UP, 1996.

Eliot, George. *Middlemarch*. Edited by Rosemary Ashton, Penguin Books, 1994.

Ellis, Steve. *Virginia Woolf and the Victorians.* Cambridge UP, 2007.

Ermarth, Elizabeth Deeds. “George Eliot's Conception of Sympathy.” *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 40, no. 1, 1985, pp. 23–42.

Martin, Kirsty. *Modernism and the Rhythms of Sympathy: Vernon Lee, Virginia Woolf, D.H. Lawrence.* Oxford UP, 2013.

Whitworth, Michael. *Virginia Woolf*. Oxford UP, 2005. 窪田憲子訳『ヴァージニア・ウルフ』彩流社、2011.

Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. Edited by David Bradshaw, Oxford UP, 2006.

--. “George Eliot.” *The Times Literary Supplement*, 20th November 1919, http://digital.library.upenn.edu/women/woolf/VW-Eliot.html

木下未果子『共鳴するジョージ・エリオットとヴァージニア・ウルフ–「私」から「私たち」へ』彩流社、2018.

仲島陽一『共感の思想史』創風社、2006.

矢野奈々『ダーク・ヒロイン–ジョージ・エリオットと新しい女性像』彩流社、2017.